



彼岸花

# ワイズ経営ニュース

編集発行人

ワイズコンサルティング  
株式会社

〒104-0061  
東京都中央区銀座1-8-21  
中央ビル5F

TEL 03 (3567) 3072  
FAX 03 (3567) 3075

9月

(長月) SEPTEMBER

17日・敬老の日  
23日・秋分の日  
24日・振替休日

日	9	23
月	10	24
火	11	25
水	12	26
木	13	27
金	14	28
土	1	15 29
日	2	16 30
月	3	17
火	4	18
水	5	19
木	6	20
金	7	21
土	8	22

## 9月の税務と労務

国 税／8月分源泉所得税の納付

9月10日

国 税／7月決算法人の確定申告(法人税・消費税等)

10月1日

国 税／1月決算法人の中間申告

10月1日

国 税／10月、1月、4月決算法人の消費税等の中間申告(年3回の場合)

10月1日



### ワンポイント 収入印紙の形式改正

7月から契約書や領収書などに貼付等する「収入印紙」の形式が改正されています。これは、偽造事件が後を絶たないことから偽造印紙の流通を防止するため、31種類ある券種のうち200円以上の19券種について、見る角度で模様が現れる技術等が取り入れられ、全ての券種に特殊発光インキが使用されています。

## 秋は夕暮れ～「枕草子」

「秋は夕暮れ。夕日のさして山の端いと近うなりたるに、からすの寝どころへ行くとして、三つ四つ、二つ三つなど飛び急ぐさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆるは、いとをかし。日入りはてて、風の音、虫のねなど、はたいふべきにあらず。」

清少納言の「枕草子」の第一段、秋の一節です。子どもの頃、国語の授業で一生懸命覚えたものの、大人になってすっかり忘れてしまった人もいるかと思いますが、久しぶりに読んでみますと、独特のリズムの良さもあってか、目が文字を追うごとに言葉がどんどん思い出されると感じる人もいます。

大まかな意味としては、「秋は夕暮れがよい。夕日が差して山の端に大変近くなっている時に、からすが寝どころへ帰ろうとして、三羽四羽、二羽三羽と飛び急ぐ様さ

えしみじみと心打たれる。ましてや雁などが連なって飛んでいるのが小さく見えるのは、大変趣がある。日が落ちて、風の音や虫の音(ね)が聞こえてくるのは、言うまでもなくよいものだ。」といったところでしょうか。

清少納言がこの作品を書いた千年前と現在とでは、見える風景に違いはあるでしょうが、鳥の飛んで行く様、風の音、虫の鳴く声などに心を寄せる心情は、現在の私たちと何ら変わらないのですね。

今はゆっくり夕暮れ時に空を見上げることも少なくなりましたが、時には秋の穏やかな空気の中、夕日を眺めたり、虫の鳴く声に耳を傾けたりして、ゆったりと落ち着いた時間を過ごすのはいかがでしょうか。

また、昔読んだ古典を今もう一度読み返せば、新たな共感や感動を覚えることができるかもしれません。秋の夜長のおともに、ぜひ。

### 季節の和菓子

四季折々の自然の風景が美しい日本。ここ数年は暑さ寒さが厳しく、春と秋の穏やかな季節がだんだん短くなってきたように感じますが、これから徐々に暑さがやわらぎ、実りの秋がやって来ます。

秋の恵みの栗や芋、柿などはそのまま頂くのも結構ですが、和菓子にして頂くと、より趣があり、季節を楽しむことができます。

四季折々の自然の風景が美しい日本。ここ数年は暑さ寒さが厳しく、春と秋の穏やかな季節がだんだん短くなってきたように感じますが、これから徐々に暑さがやわらぎ、実りの秋がやって来ます。

暑い夏を乗り越えてやって来る豊かな実りの季節を、繊細な仕事を施された美しい和菓子とともに迎えてみませんか？

## 秋の薔薇

華やかな美しさと優雅な香りで「花の女王」とも言われる薔薇の花。

春のシーズンは5～6月頃、春にのみ花をつけるつる薔薇や繰り返し咲く立ち木の薔薇など、多くの種類の薔薇が花を咲かせます。また、春の暖かさで花にボリュームがあり、見ごたえがあるのもこの時季の薔薇の特徴です。

そして秋、立ち木の薔薇がまた美しく咲くシーズンが10～11月頃。春に比べて花は小さいのですが、その品種本来の色や模様が鮮やかに現れ、深い香りを持つのが特徴です。

春はボリュームのある華やかな景色を楽しみ、秋はひとつひとつの花の姿や香りを楽しむなど、季節によって色々な愛で方ができるのが薔薇の花です。

あとひと月ほどで、秋のシーズンが到来します。ぜひ、地域の薔薇園などで美しい薔薇の花を楽しんで下さい。

言われる粗利と一致します。  
それでは、生産性分析の主な指標をみていきましょう。

### (1) 労働生産性

労働生産性Ⅱ会社全体の付加価値／従業員数

労働生産性とは、従業員一人ひとりが生んだ付加価値を求めた指標です。会社経営は、経営者や従業員が、魅力ある製品や商品を作りだし、またはサービスを産み出して、より高い付加価値を産み出すことに重点を置いています。それがライバル会社との優位性を表すことになるからです。労働生産性の指標は、もちろん高ければ高いほどよく、従業員はそれだけ効率よく働いていることを表します。労働生産性を高めていくことは、従業員の給与を上げるためにも、会社の利益を上げるためにも必要不可欠なものです。前記算式からもわかるように、労働生産性を上げるには、①分子である付加価値を上げるか、②分母である従業員を減らすかのどちらかです。しかし、従業員を減らすことは容易にはいかず短絡的で

す。長い目でみて企業基盤を築くには、やはり付加価値をいかに上げられるにかかってくるでしょう。これはどの業種にでもいえることです。

### (2) 労働分配率

労働分配率Ⅱ人件費／付加価値額

生産性を分析していくには、会社が産んだ付加価値がどこにどのように使われているかを見ることが重要です。労働分配率は、付加価値のうち、どれだけ人件費に分配されたかを分析し、付加価値に対する人件費の割合を示すものです。

例えば、控除法で付加価値を計算した金額が一、〇〇〇万円で人件費が五〇〇万円だった場合には付加価値のうち五〇％を人件費として支払っていることになり、比率が低いほど効率よく利益を上げているということも言えますが、低すぎるのも問題ともいわれます。適正な数値がよいです。付加価値の中でも人件費は最も大きな割合を占めますが、その人件費が付加価値の大半を占め、利益がほと

んど出ていないとなると企業経営においては問題です。

ただ最近ではとかく人件費は固定費であり、削減する方向性の企業が多いですが、それでもやはり削減だけでは従業員のモチベーションが低下してしまう恐れがあります。中小企業では、五〇～六〇％程度が普通ですが、この数値が大きすぎると利益を食いつぶし、赤字に転落してしまいます。ただし、サービス業などで労働集約型の業種の企業では、もう少し高い傾向にあるようです。同業他社との比較をすることで自社の労働分配率が高いか否か判断することが重要です。ただし、労働分配率が高い企業、すなわち付加価値に占める人件費率の割合が高い企業には、何かしらの問題があると考える方が妥当だともいえます。

労働分配率が高い企業：給与水準が高い企業もしくは労働集約型産業

労働分配率が低い企業：給与水準が低い企業もしくは設備集約型企業

よって、内部留保による資本蓄積が可能な範囲の中で従業員

も会社も満足できるWINWINの均衡点を見出すのが重要です。努力目標としては、労働分配率が低下傾向にあり、かつ賃金水準が高い状態が理想的です。

### (3) 労働設備率

有形固定資産／従業員数

労働設備率とは、従業員一人あたりがどれくらいの設備（有形固定資産）を持っているかを計算することで、その会社の技術水準、設備投資の状態を示す指標になります。ここでいう、有形固定資産には、土地、建物、機械装置などが含まれ、リース設備は入れないことが多いようです。一般的には、労働設備率が高いほど、生産効率がよく労働生産性が優れているといわれますが、これも業種によってもさまざまです。製造業などは大きな設備投資が必要で、数値が高くなる傾向にあります。設備集約型の企業においては、この数値が高いほど機械化・装置化が進んでいることを示します。



# 労働生産性分析



生産性(Productivity)とは、投入量と産出量の比率をいいます。投入量に対して産出量の割合が大きければ、生産性が高いこととなります。例えば、従業員の一人ひとり、機械などの設備を投入して、どれだけ効率よく産出(利益)を上げたかということです。一般的に、企業経営の三要素は「ヒト、モノ、カネ」といわれています。よって、生産性分析とは、売上や利益を上げるために、どれくらい「ヒト、モノ、カネ」の投資が必要であったかを分析する指標です。つまり、投資した「ヒト、モノ、カネ」といっ

た資源が、いかに効率的に付加価値を生み出したかを分析する指標といえます。よって、「インプット」と「アウトプット」の指標ともいえます。

生産性では大きく「労働生産性」と「設備生産性」に分けることが出来ます。通常、生産性というと、労働を投入量として測った生産性である、労働者一人一時間あたりの生産性 $\parallel$ 「労働生産性」を指すのが一般的です。生産性分析には「従業員一人あたり」、「機械、設備一単位あたり」、「投入資金の1円あたり」などがありますが、今回は労働生産性の分析である「従業員

員一人あたり」で使用する計算式をご紹介します。

生産性分析とは、経営資源(ヒト、モノ、カネ)をいかに効率的に使用して付加価値を生み出したかを分析することになりますが、そもそも付加価値とはなんでしょうか。

付加価値とは、企業が生産によって生み出した価値を指します。付加価値の代表的な計算方法には、「控除法」と「加算法」があります。計算式には、「中小企業庁方式」や「日銀方式」やそれ以外の独自の計算式が複数存在します。これら計算式の中には、財務諸表だけではわか

らない金額も使用されていることもあります。今回は、この中でも代表的な「中小企業庁方式」と「日銀方式」をみてみましょう。

## ・ 中小企業庁方式

控除法とも呼ばれており、  
付加価値 $\parallel$ 売上高 $\parallel$ 外部購入価値で求められます。  
外部購入価値には、材料費、購入部品費、運送費、外注加工費などがあります。

## ・ 日銀方式

加算式とも呼ばれており、  
付加価値 $\parallel$ 経常利益 $\parallel$ 人件費 $\parallel$ 貸借料 $\parallel$ 減価償却費 $\parallel$ 金融費用 $\parallel$ 租税公課で求められます。  
中小企業庁方式では、付加価値は売上高から外部購入分の価値を差し引いたものという考え方に対し、日銀方式では、付加価値は製造過程で積み上げられていくという考え方です。一般的には、簡便な控除法(中小企業庁方式)が用いられることが多いようですし、一般的によく